Society for Mind-Body Science

験の意義に着目しつつ、体験学習をさかんに奨励している。ところで、問題は「自分で」に相当する「分母」の在り方にある。自分の「生身のからだ」(60兆個の全細胞）という自他不二の「不随意性の分母」をとおして「視る・聴く・触る」ことを経験すれば、そこでは、「犬も歩けば棒に当たる」論理が働いて、知性原理の能動様態と直観原理の受動様態との協働循環が多かれ少なかれ生成する。結果として、自他不二の「生の循環」が不随意に起こる。ところが、自分の「頭脳」(140億個の脳細胞）のみを分母に設置するとき、その「随意性の分母」の働きが能動的に先行して、譬えば「楽」を優先させてしまって、受動態様の「苦」を敬遠するという随意の取捨選択を働かせることになる。それでは、俚諺「苦あれば楽あり・楽あれば苦あり」の教える「生の循環」が途切れてしまう。ボクは、「キレる子ども」「モノ化する身体」の悲劇が、この取捨選択を迫る知性原理によって捏造されていると思う。

現代人は、子どもも大人も、すべての判断基準の分母に仮想原理「頭の働き」(「我考える、ゆえに我在り」論理）しか設置しない傾向にある。つまりは「頭でっかち」にすぎる。だから、高橋さんは願う。子どもが自分のからだを外側からではなく内側から感じる体験を保障する…環境を整えたい、と。同感である。ボクも、高橋さんに倣って、受動様態の生活を見直せと訴えたい。どうやら21世紀の最大課題は、「からだ」問題に、終始するのではないか。

無動機殺人について

東京工業大学 社会理工学研究科　田 中 彰 吾

近年、若者たちの手による不可解な殺人事件が多く報じられている。記憶に新しいところだけでも、佐賀の少年バスジャック事件、大分の一家六人殺傷事件、岡山の金属バット殺人事件などが挙げられる。少し前には、神戸市須磨区での「酒鬼薔薇」少年による殺人があったし、さらに記憶をたどっていくと、宮崎勤による幼女連続誘拐殺人などという事件も思い起こされる。ニュースで報道されるたびに、「またか」という思いに駆られる方も多いだろう。どの事件も、「いったいなぜ？」と困惑させられるものばかりである。

こうした状況のなか、巷では、「心の闇」という言葉が時代を照らすキーワードとなっている感がある（少し前に流行した「癒し」とはなんとも対照的な響きをもつ言葉である)。一連の不可解な殺人事件は、とくにそれが少年による殺人事件の場合、「現代の若者たちに巣食う心の闇」などと形容され、伝えられることが非常に多い。やはり常識的な立場からすると、まったくもって不可解かつ不気味であり、動機がよく分からない犯行だと映るからであろう。学術用語として定着しているわけではないが、こうした特異な事件を指して「無動機殺人」と一括りにする呼称も存在する。

無動機殺人、これはどうやら現代的な現象らしい。作家のコリン・ウィルソンは、『殺人ケースブック』という著作の中で、殺人が時代とともに変化してきている様を描いている。それによると、こうした不可解な殺人事件は20世紀以降の現象とのことである。かつては貧困を動機とする強盗殺人や、自分の身の安全を守るための殺人が多かったが、20世紀以降の混沌とした都市社会では、連続殺人、大量殺人といった、あたかも殺しそのものを目的としているかのような事件が激増したという。特定の人物に怨恨や殺意を抱いたことから殺人にいたるという古典的な図式とは大きく異なる殺人が多く見られるようになったのである。

今日ではこれに加えて、殺人事件の背後に管理社会や情報社会に固有の要素を見出すこともできそうである。殺人者は、システム化された社会のなかで自分自身を見失い、その悲痛な叫び声をメディアに向かって放つ。酒鬼薔薇少年の犯行声明文に記された「透明な存在」というあの一言に、すべてが集約されてはいないだろうか。システムの部品と化して存在感を失ってしまった自分、日々押し寄せる大量の情報のなかで本来の輝きを失ってしまった自分、こういったことが間接的に読み取れるだろう。酒鬼

NII-Electronic Library Service

Society for Mind-Body Science

薔薇少年は、ほとんど失われた「自己回復」のために殺人を犯しているかのように見えるのである。「人を殺してはならない」というごく当たり前の倫理規範ですら、現代社会ではその自明性を失いつつあるかのようである。

大人たちはこういう状況に対して、どう答えるのだろう。須磨の事件以来、「なぜ人を殺してはいけないのか？」という議論がさまざまなメディアで繰り広げられている。かつてひねくれた少年だった私も、思春期のころ、周囲の人々にこの問いをぶつけてみたことがある。「そんなの当たり前のことだ！」と怒りを顕わにする人、「自分が殺されるのは嫌だから、他人も殺してはいけない」とありきたりな理屈を述べる人、「法律で決まっているから」とクールに答える人、はたまた「本当は殺してもいいのかもしれないけど、自分はやらない」と実に消極的(?)に答える人…。やはり、自明のことを問われても答えようがない、ということなのであろう。だが自明視されている規範を問い正そうとするのが思春期の特徴のひとつである。一部の少年にとって、こういう問いに一度とり憑かれるとそこから抜け出すのは難しい。

生まれて間もない乳幼児が大量に死んでゆくような、つねに死と向き合わねばならない社会では、「人を殺してはならない」という規範の自明性が疑われることはきわめて稀であろう。死に裏打ちされた生の価値が社会の成員のあいだで共有されているからである。だが、近代以降の社会は死について考えることを長らく怠ってきたし、進んで死を隠蔽しようともしてきた。科学技術の進歩によって死を遠ざけ、生を引き伸ばすことが至上の価値であるかのようにこの社会全体が振舞ってきたのである。なにも死を礼賛しようというのではない。死が何であるのかを考え、そこから生の意味を改めて問い直そうとする態度が必要とされていると思うのである。若者たちの引き起こす不可解な殺人事件は、このことの必要性を社会全体に訴えているのではないだろうか。「時代の申し子」と言われる犯罪が、殺人＝他者の生の剥奪へと向かっているという事実は、それを示唆しているように思われてならない。

Mind-Body Science　会員投稿について

一般の読者にとってわかり易い内容の投稿をお寄せ下さい。

1）内容について
- 瞑想・気功・修業・鍛練・技芸・技能など心身に関する具体的な体験やアイデアについて。
- 研究にあたって気づいたこと、興味をもったことなど。

（学術的内容のものや難解なものは採用しません）

2）4000字以内。編集部で字句の修正、削除、加筆などを行う場合もあります。

3）投稿の採否は編集部で決めます。原稿はお返ししません。

4）無署名、および匿名の原稿は採用しません。必ず会員の種別、氏名を記して下さい。

送付先：人体科学会事務局
162－8644　新宿区戸山　1－24－1
早稲田大学文学部石井康智研究室内
TEL・FAX：03－5286－3545
E-mail　：jintaikagaku@smbs.gr.jp
URL　：http://www.smbs.gr.jp/

NII-Electronic Library Service